

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：33941

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19117

研究課題名（和文）糖尿病足病変患者の入院時における看護実践モデル構築に向けた基盤研究

研究課題名（英文）Basic Research to Develop a Nursing Practice Model for Inpatients with Diabetic Foot Lesions

研究代表者

棚川 綾子（牧村綾子）（Tochikawa, Aya）

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師

研究者番号：70465582

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究目的は、糖尿病足病変入院患者への看護師の実践を明らかにすることである。足病変患者への看護の現場を参与観察し、その観察内容を現象学的に分析した。看護師は、処置や退院調整時に、言葉だけでなく話し出すタイミングや動作から、患者の足病変への対処の仕方や療養への意思を知覚するため、考えを代弁し、時に自分の意見を差し控えていた。それにより、医療者とのやり取りにおいて、患者が中心になれるようにし、患者が主体性を発揮できるのであった。看護師の知覚からの実践は、糖尿病と共に生きてきた学びをもとに、足病変の急性的な状況にตอบสนองしていく連続体として、患者を捉え応じる営みなのであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

糖尿病足病変入院患者は、糖尿病を患ってきた慢性性と切断の危機的状況にある急性期とが混在し、入院治療を要することが多い。これまでは、慢性期/急性期という病期の特徴から看護が示されていた。本研究では、看護師は、糖尿病と共に生きてきた時間を重ね、足病変にตอบสนองする患者の連続性を捉え応じていたことが明らかになった。足病変患者の看護において、従来の病期別看護の視点を越えた実践を示すことで、それまでの看護の見方を問い直すきっかけを提示することができる。高齢化社会において、慢性性と急性性を統合した看護実践を考へることは、看護を再考し、実践を変化させていくことになると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to identify nursing practices for inpatients with diabetic foot lesions. Data were collected during participant observation and the observations were analyzed in a phenomenological descriptive approach. During treatment and discharge coordination, nurses expressed the patient thoughts, and sometimes refrained from giving their own opinions in order to perceive the patient wishes for how to deal with the foot lesions and for recuperation by the timing of starting talking and behaviors as well as words of patients. Through this approach, nurses were able to place patients in the center and become independent in the interaction with healthcare professionals. The practice based on the perception of nurses is their response to patients as a continuum with the patients to respond to the acute conditions of foot lesions, using the learning from patients living with diabetes.

研究分野：臨床看護

キーワード：糖尿病足病変患者 看護実践 現象学的研究

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、全世界で糖尿病の罹患期間の長期化・合併症の進行を背景に、糖尿病患者の4~10%が糖尿病足病変(以下「足病変」とする)を併発する。日本では、義足装着した患者の切断原因は、1980年代から糖尿病起因が首位となった。足病変は、患者のQOLを低下させるだけでなく、医療費及び社会保障費を高騰させるため、大きな問題となっている。日本では、高齢や透析による動脈硬化から重度虚血患者が増えたことでその成因が変化し、予防的フットケアや治療の限界が考えられている(河野, 2016)。それは、多くの足病変患者は入院が必要となり、切断を免れない可能性があるのである。足病変に関する国際ワーキンググループは、足病変の管理と予防や診療のガイドラインを提示し、根拠ある介入ができる取り組みを始めた。諸外国では足病医もしくは足治療師(Podiatrist)の専門家が介入し、患者は適切な処置を継続的に受けられることで壊死を最小限に留められるようにしている。かつ、テレメディスンや訪問看護体制が整備され、在宅でそのケアを受けることが可能である。日本は、足病医のような専門医等を育成する教育課程は存在しない。また日本の足病変患者は、切断率や再発率が高く、腎不全などの糖尿病合併症が進行している特徴がある(河野, 2009)。つまり、専門医の継続的な介入がなく、高齢かつ合併症の全身的要因が加わり、急激に悪化する難治性の足病変患者が入院するということである。

足病変患者の看護は、ケアプランのガイドにおいて糖尿病に起因する神経障害や皮膚損傷に含まれ、主題的に扱われない。そのため、血糖値のコントロールを主眼においた療養生活支援の糖尿病看護に傾倒しやすい。足病変入院患者は、自分の急激な身体の変化に、それまでの糖尿病治療の後悔と、下腿切断の可能性を示唆された苦しさのただ中で、医療者とのかかわりを求めている(棚川, 2009)。足病変患者の看護は、よりよい療養生活を主眼に置くだけでなく、急性の状況にある患者にいかに応じていくのかを考える必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、足病変患者を看護する看護師の入院時の看護実践を明らかにすることである。それにより、糖尿病の慢性経過のなかで急激な身体変化を伴う足病変患者への、帰納的な看護実践モデル構築の基盤を作ることである。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン

看護師は、足病変患者に看護過程のような科学的思考だけでなく、身体を挺し関わっていることが明らかになっている(棚川, 2021)。よって看護師が思考し意図的に介入している見方を棚上げし、看護実践を事象そのものから明らかにする現象学的研究である。

2) 研究参加者

研究参加者の条件は、足病変患者が入院している病棟に勤務して2年目以上、かつ足病変患者の看護の経験がある看護師とした。

3) データ収集方法

データ収集は、患者に看護師が応じている場面のデータを収集する目的で、参与観察を実施した。病棟での看護の実践は、患者と看護師の1対1の場面に限られない。複数人で患者を看護するため、参加者を中心に病棟の看護師たちも含めていかに応じたのかも記録にした。また、参与観察で研究者が気になった場面について、個別面接を実施した。

4) データ分析方法

本研究では、松葉、西村(2014)を参照し分析した。データは、患者と看護師を2項に分けず、足病変患者の言動に参加者がいかに応じていたのかという、相関の視点から看護師の実践がいかに成り立っていたのかを記述した。

5) 倫理的配慮

本研究は、2022年度日本赤十字豊田看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号2121)。参加者には、研究の趣旨、匿名性の担保、研究辞退によって不利益を被らないことを口頭と文書で説明し、同意を得た。

4. 研究成果

研究協力施設は、地域における急性期病院であり、入院治療を要する足病変患者は、形成・整形外科病棟に入院していた。研究の参加同意を得た看護師は、該当病棟に勤務する20歳代から50歳代の女性の3名であった。参加者の日勤帯に、創傷ケア介助や退院指導・検温・患者について看護師間で相談する場面を計11日間参与観察し、また計5回の個別面接を実施した。

下記に、足病変患者を看護する看護師の実践の結果と、実践の在り様についての考察を示す。

1) 治療の場の間合いを取り、患者を中心に据える

足病変患者に医師が処置時を行う際、医師や看護師たちは、改善を喜び合うなか、患者は話すこともなく天井を眺め、足病変を見ないでいた。看護師は、その患者の応答に、まだ足が見れないであることを患者に代わって発言することで、改善に向けて一気に動き出そうとする医療者の態度をけん制し、患者が自分のペースで足病変に向き合えるようにした。また、看護師は、自宅療養の方針にある患者の退院後の生活の危険性を危惧し、医師に意見した。しかし患者が即座

に自分の可能な活動を話してきたため、看護師は意見をすることを直ちに止め、自宅療養時の創傷処置の方法を医師に確認した。以上のように、看護師は、患者の視線や行動、話す内容と話し出すタイミングから、患者の足病変への対応や退院への意思を知覚するために、その場のメンバーの間合いをとっていた。患者を医療者のペースに巻き込まないようにし、本来の在り方で居られるようにしていたのであり、患者を医療メンバーの中心にあるようにしていたのであった。

2)患者の身体性を体感しながら、危険を捉える

看護師は、足病変がある患者が退院の意思を示したため、その意思を優先しようと退院に向けて処置の方法を指導した。しかし、体格がよく患肢の免荷のため生活の支援をしていくなかで、ベッドに座る振動や腰回りの太さといった患者の身体性を体感し、体幹保持の難しさや、その身体で足病変を処置し独居で自宅療養することの難しさを捉え、医師や他の看護師に相談をした。看護師は、患者の身体性を自身の身体で感じながら、患者の退院後の生活の困難を知覚していた。そのため、患者の意思を尊重しながらも、療養に伴う危険を回避できるような行為を始めるのであった。看護師は、特徴的な患者の身体の質感が身体感覚に訴えかけられ、安全対策を講じていたのであった。

3)身に迫る厳しい事態に立ち向かう態勢が出来ていく

足病変患者の足病変から、異臭が生じ、それが病室全体へ広がり、日ごとに増強していた。病棟の朝の申し送りにおいて、毎日その状況が病棟看護師たちに共有された。申し送りが終わるやいなや看護師同士で、患者について話し始めるのであった。徐々に異臭が強くなると共に、申し送り時に新たな情報が追加されていた。その異臭と共に次々更新されていく情報に追い立てられ、病棟みんなで対応すべき厳しい事態として知覚され、その状況に関与せざるを得なくなっていた。それは、病棟全体で悪化していく足病変に、患者と共に立ち向かう態勢になっていた。

4)足病変患者の看護実践の在り様

看護師は、入院している患者が治療を受ける客体にするのではなく、患者の在り方や意思を貫き通せる場を創り出し、主体性が発揮できるようにしていた。糖尿病患者は、糖尿病と共に生きた時間のなかで、応答責任を果たすことを学ぶ(Hosono, 2022)ことが明らかになっている。足病変は、糖尿病の病いの経過の中で併発するのであり、患者にとっては、糖尿病から継続した事象である。足病変患者は、足病変に対して自らのスタイルや療養に対する意思を貫いていた。これは、患者が病いからの呼びかけに応じられる可能性を、糖尿病を生きながら高めていたのであり、足病変からの呼びかけに応答責任を果たしていたのである。看護師は、患者の糖尿病の連続した時間性を尊重していたのであった。また、看護師は、足病変の異臭や重ねられる情報から事態の危機を知覚し、患者だけの出来事にするのではなく、みんなでそれに立ち向かう態勢になっていた。足病変は、難治性であるからこそ、患者の状況に応じた対応が必要になる。「様々なやり取りを介して、自己と他者を包括する相互行為の場が成立し」、「『私たち』という主体性が成立する(田中, 2022)」と言われている。治療の過程のやり取りが、患者を中心にした医療者との共同体としての主体性を生むのであった。実際に看護師は、患者の身体からの現れに危険を知覚すれば、それを根拠に安全が確保できる行為を実施していた。これは、足病変を治癒させ日常生活に戻る共同体の目標に向かう場の状況に、適した行為を取っていたとも言える。このような実践は、患者と看護師がやり取りする病棟の現場性も混ざり合いながら創り出されるのであった。足病変患者の看護実践は、糖尿病を生きてきた時間性や、足病変の異臭などの症状や足病変を有す現在の身体性も纏った患者と、看護師がそこでやり取りする動的な病棟の場が創り出していた。

足病変患者の身体には、今まで糖尿病と共にあった時間の積み重ねも、足病変である身体を生きることも、同時に現れる。看護師は、患者の現れに、意味を知覚して応答し、病棟の場が、その応答を促していくのであった。看護基礎教育において、急性/慢性という病期の特徴から看護を考えることが多い。しかし、実際に営まれている看護を捉え直してみると、看護師が足病変患者の身体の実現や、看護師たちがそこでやり取りを身体で応じることが、実践となっていたのであった。看護師は、「意味への歩みとしての『知覚』を行使(加賀野井, 2023)」しているからこそ、その時その状況の患者に、適切な看護が行えるのである。看護師の身体からの応答が、慢性性も急性性も含み込む統合体の足病変患者への看護の実践の基盤になっていると言える。

引用文献

- Hosono Tomoko & Tochikawa Ayako(2022). A meta-synthesis of phenomenological studies on experiences related to diabetes in Sweden focusing on learning to live with diabetes. International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-being, 17(1), 1-21.
- 加賀野井秀一(2023).メルロポンティ 触発する思想.白水社, 東京.
- 河野茂夫(2009).糖尿病足壊疽.Diabetes Frontier, 20(4), 447-451.
- 河野茂夫(2016).糖尿病足病変～総論～.Diabetes Frontier, 27(1), 13-18.
- 松葉祥一, 西村ユミ(2014).現象学的看護研究 理論と分析の実際. 医学書院, 東京.
- 田中彰吾(2022).自己と他者.東京大学出版, 東京.
- 棚川綾子(2009).糖尿病下肢潰瘍患者の体験世界の理解.日本糖尿病教育・看護学会誌, 13(2), 106-116.
- 棚川綾子(2021).身体が織りなす看護の営み-急性期にある糖尿病入院患者と看護師の関係の現象学的研究.日本看護科学学会誌, 40, 369-377.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計 3 件（うち査読付論文 2 件 / うちオープンアクセス 2 件）

1. 著者名 栩川綾子	4. 巻 40
2. 論文標題 身体が織りなす看護の営み-急性期にある糖尿病入院患者と看護師の 関係の現象学的研究	5. 発行年 2021
3. 雑誌名 日本看護科学学会誌	6. 最初と最後の頁 369-377
掲載論文の DOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5630/jans.40.369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている	

1. 著者名 栩川綾子	4. 巻 26
2. 論文標題 【糖尿病治療とケアの最前線～糖尿病治療の最新の知見とケアのあ り方～】身体に根差した看護 糖尿病合併症患者の看護をとおして.	5. 発行年 2021
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文の DOI (デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしていない	

2. 著者名 栩川綾子	4. 巻 14
2. 論文標題 患者の実存を支える身体つながり 下肢切断患者への看護師のか かわりの内実	5. 発行年 2022
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文の DOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.24525/shitsuforum.14.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている	

〔学会発表〕 計 3 件(うち国際学会 1 件)

1. 発表者名 栩川綾子
2. 発表標題 糖尿病足病変入院患者への看護師の実践 - 「励ます」ことの内実-
3. 学会等名 第 3 回日本フットケア・足病医学会年次学術集会
4. 発表年 2023 年

1. 発表者名 Tochikawa Ayako

2. 発表標題 Details of nursing practices for inpatients with diabetic foot lesions -The nurse who exists with patients as a collaborating partner-
3. 学会等名 40th International Human Science Research Conference
4. 発表年 2023 年

1. 発表者名 栩川綾子
2. 発表標題 糖尿病足病変患者の在宅療養に向けた看護実践の成り立ち
3. 学会等名 第 43 回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 棚川綾子	4. 巻 14
2. 論文標題 患者の実存を支える身体つながり 下肢切断患者への看護師のかかわりの内実	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24525/shi tsuforum.14.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 棚川綾子	4. 巻 26(556)
2. 論文標題 【糖尿病治療とケアの最前線～糖尿病治療の最新の知見とケアのあり方～】身体に根差した看護 糖尿病合併症患者の看護をとおして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 棚川綾子	4. 巻 40
2. 論文標題 身体が織りなす看護の営み 急性期にある糖尿病足病変入院患者と看護師の関係の現象学的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 369-377
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.40.369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 棚川綾子
2. 発表標題 糖尿病足病変入院患者への看護師の実践 「励ます」ことの内実
3. 学会等名 第3回 日本フットケア・足病医学会年次学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tochikawa Ayako
2. 発表標題 Details of nursing practices for inpatients with diabetic foot lesions -The nurse who exists with patients as a collaborating partner-
3. 学会等名 40th International Human Science Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 棚川綾子
2. 発表標題 糖尿病足病変患者の在宅療養に向けた看護実践の成り立ち
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------